

## 『天地明察』読後感

池田 隆

読書会を明後日に控えた夕暮より、冲方丁著の大作『天地明察』を一気に読む。十七世紀末の江戸期に平安期より八百年間用いられてきた中国伝来の暦を日本で初めて改めた渋川春海の伝記物語である。

主人公の春海については高校の教科書に名前が出ていたなと思いつ程度程度の知識しかない。しかし読み始めると、保科正之、関孝和、水戸光圀などの歴史的超有名人から山崎闇斎、山鹿素行、本因坊道策など主人公と同様な人物が次々と登場し、興味が膨れていく。舞台がなじみ深い皇居周辺から牛込、渋谷、麻布辺りというのも嬉しい。主人公は幕府碁師の家に生まれ、優れた棋士であった。そのうえ和算や天文にも没頭する。棋士としては道策に敗れ、和算の才では孝和に及ばなかったが、一途な態度を正之や光圀に認められ、彼らの命を受けて日本独自の暦改正に成功する。

読みながら様々な知識を得て雑感を覚える。

◇ 天子や天皇が宇宙造物主の天命を受けると考えていた時代、天文知識やそれを日常の行事や生活に結びつける暦の制定が最高の権威の象徴であった。暦は現代の世界標準やOSを上回る偉大なソフトウェアなのだ。幕府は武断主義から文治政治への転換の証として朝廷に代りその制定権限を得て、天文方という現東大の前身機関を作った。

◇ 春海は幕府碁師として有力な大名や公家に親しく接し、思いもよらず日本固有の暦の制作を命じられる。すると彼らの政治力や人脈をたくみに利用。先輩や同僚の指導援助にも助けられ、その実務能力によって暦改良に成功し、天文方の初代を務める。

◇ 当時地球が丸いという知識はあったが、地動説は未だ伝来していなかった筈。天体観測、渾天儀、和算を用いて日月食をどのように予測したのか、その初歩的な基本原理だけでも学びたい。

◇ 我々も昭和四十年代、欧米に依存していた発電機器の技術分野で土光敏夫社長から「ジージーと蟬のように鳴くな」とGE社からの脱皮を命じられたものだ。